

## 洋10-102

### 「ベスト・キッド」

☆☆☆

2010（平成22）年8月14日鑑

賞<梅田ピカデリー>

監督：ハラルド・ズワルト

ドレ（12歳の少年）／ジェイデン・スミス

ハン（アパートの管理人、カンフーの達人）／ジャッキー・チェン

シェリー（ドレの母親）／タラジ・P・ヘンソン

メイ（ドレの友人の女の子）／ウエンウエン・ハン

チョン（地元の少年のリーダー）／チェンウェイ・ワン

リー先生（武術学校の先生）／ユー・ロングアン

2010年・アメリカ映画・140分

配給／ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント

#### <空手からカンフーへ！舞台も北京へ！主人公は？>

本作は1984年の映画『ベスト・キッド』のリメイクとのこと。そして、今回は①空手からカンフーへ、②教師役が日系人の老師からジャッキー・チェン扮する中国人へ、③舞台も北京へと変わったうえ、主人公も黒人の12歳の少年と大きく様変わり。

全編を貫くテーマは師弟愛だが、見モノはハイライトシーンにおける決戦。ただか12歳の子どものカンフー試合にすぎないとタカをくくってはダメ。どの程度特撮を使ったのかは知らないが、ウィル・スミスの息子ジェイデン・スミスがにわかじこみとは思えない切れ味の強い技をくり出している。

こんなシンプルな感動モノは必ず一定の評価を受けるはずで、アメリカでも大ヒットだが、オール中国ロケで制作費が安上がりだったため、儲けは大きいらしい。すると今後は、この手の作り方のハリウッド映画が増えてくるのでは？

#### <何事もバランスが大切！>

本作の主人公は、あくまでジェイデン・スミス扮する12歳の少年ドレ。したがって、ジャッキー・チェン扮するハンはあくまでその引き立て役に徹しなければならぬが、さてそのバランスは？一般的にはジャッキー・チェンはド派手なアクションが売りモノ。それはそれでいいのだが、本作ではちょっと控えめで渋い味のジャッキー・チェンをたっぷり味わいたい。

母親シェリー（タラジ・P・ヘンソン）の転勤のため、デトロイトから北京へ引っ越してきたドレが地元の少年たちのグループのリーダー・チョン（チェンウェイ・ワン）たちからにらまれたのは、ドレが英語を話すことができる女の子メイ（ウエンウエン・ハン）と親しく話をしていたため。メイはバイオリンを習っているお嬢サマだから、黒人の男の子と付き合うのはいかがなもの？そう思っていると、案の定両親から「あんな子と付き合ってはダメ」というお達しが出されてしまったが、そこに至るまでのドレとメイのほのぼのとしたラブロマンス(?)も本作では少し描かれる。つまり、師弟愛というテーマの他、ロマンスの味付けもバランスよくなされているわけだ。

現実問題としては、わずか数ヶ月の指導よろしきを得て急にカンフーの達人になるというストーリーはバカげているが、それに説得力をもたせているのが、中国武術の聖地たる武当山での撮影。長い長い階段を歩いて上る撮影は大変だったらしいが、「これぞカンフーのメッカ！」という武当山での撮影が、本作のスパイスとしてよく効いている。本作は2時間20分と長いが、そこらのバランスが絶妙。さらに、キャリアウーマンらしい母親の仕事と子育てとのバランスもいい。全体のストーリーは単純だが、そんなバランスの良さが本作の生命線！

#### <決勝戦の迫力は？あの技は？>

シルベスター・スタローン主演の『ロッキー』シリーズでも、李連杰（ジェットリー）主演の『スピリット』（06年）（『シネマルーム17』 85頁参照）でも、ハイライトはリング上での決勝戦。本作はジュニア対決だからそれと同じ迫力を求めるのはムリだが、スリーポイント制によるドレとチョンの決勝戦はそれなりの迫力がある。チョンの師匠リー先生（ユー・ロングアン）はハンと違って「敵は徹底的にたたけ！」と教え込むイヤな奴。したがって、準決勝戦でリー先生がドレの対戦相手に授けた作戦は、「勝てなくてもいいからドレを痛めつけろ」というものだ。その教えを忠実に守った少年は、反則負けを覚悟の上でドレの足に大打撃を与えたから、これによってドレは決勝戦を戦う前に大きなハンディキャップを。

一時は試合続行不可能と宣告されかけたが、そこはハンの治療よろしきを得てドレは決勝戦のリングへ。そして、2ポイントvs1ポイントとドレが優勢になった時、リー先生からチョンに出された指示とは？それにていよいよ万事休すと思われる中、奇跡的に立ち上がったドレが最後にくり出したあっと驚く技とは？武当山で見た、蛇を相手に踊るような動きを見せていた達人の技が、こんなところで生かされようとは・・・。

さすが、カンフーは心で戦うものと実感！

2010（平

成22）年8月16日記